周辺からの記憶 12

座談会：災害とコミュニティ ～物語、記憶、レジリエンス～

村本邦子（立命館大学）

十年プロジェクトも 5 年がすぎ、いよいよ後半期に入る。このあたりで、再度、プロジェクト理論化に向けた座談会をしようということで、2016 年 7 月 11 日、一緒にプロジェクトを進めてきた団士郎、中村正、鵜野祐介と 4 人で語り合った。仕事の合間の 3 時間ほどだったが、テープ起こしをし、少しだけ編集を加えたものを提示する。

この後、7 月 15 日、再び熊本へ行った。今回は、厚労省からの派遣で、熊本県の婦人相談員研修と熊本地震に関するヒアリングを行うという役割だった。熊本には十年来、研修を続けてきた婦人相談員のグループがあって、前回、訪問した時に、彼女たちから、「災害に際して婦人相談がどんな影響を受け、どうしたらいいのか、記録を探したが、見つからなかった。自分たちのためにも、是非、振り返りをして、今後のために記録を残したい」という声が上がった。私には、これが格別に嬉しく、誇らしく、自分にも何かお手伝いができたらと思ったことが実現したものである。

研修に際して、自分自身が阪神淡路大震災の時に経験したことをどんなふうに記録したのだろうかと、二十年以上前に発行した『女性ライフサイクル研究第 5 号：阪神大震災～女の視点から捉え直す』（女性ライフサイクル研究所）を書棚の奥から引っ張り出した。自分が書いた「『こころのケア』と人権と･･･」という序文には、

> この時、初めて「こころのケア」という言葉が生まれたが、「こころの」は心を対象にするという意味ではなく、「心のこもった」「真心からでた」「心に響く」などの意味でなければならない。「こころのケア」は相互的なものであり、ボランティアに馳せ参じた者たちは、自らの疼きを癒しに行ったのだと考えれば合点がいく。かくして、心のケアを専門とするものは、その存在自体が矛盾を孕んでいることを自覚しつつ、それでもなおかつそこに留まろうとする意味を考え続けなければならない。

などと書いている。「震災と女たち」の章では、震災を生き抜く女たち、震災と女性の人権、

震災と性に関する論考が集められている。「震災と子どもたち」「コミュニティと救援サービス」という章もある。コラムも合わせると50人以上もの執筆者が原稿を寄せてくれていて、全体として多声的な記録となっている。20年経った今なお新鮮で、これを震災発生後、半年間で発行したとは、なんてすごかったんだと感嘆した。逆に言えば、二十年以上経って、自分はいったいどれだけ賢くなったのだろうと考えた時、もしかするとたいして変わっていないのかもしれないとちょっとがっかりもした。(この冊子、若干の残部があったので、関心のある方はお問合せください。)

あらためて記録を残すことの重要さを再認識する機会になった。この冊子がなかったら、ここに集められたたくさんの声はなかったことになっていただろう。現在、熊本での婦人相談員ヒアリング結果をまとめているところである。そんな作業をしながら、座談会の記録を読み返していると、また新たに見えてくることもある。

さらに、その後、7月24日～8月25日、台湾に滞在した。小さな島に津波のように繰り返しやってくる外部からの侵入と災難。その記憶と歴史の残し方は時代とともに刻一刻と変化してきたこと、今なお変化しつつあることが感じられる。

レジリエンスは物語を生み出す力のなかにあるが、生み出された物語によってもまた、レジリエンスが生み出される。コミュニティを支える力を持つ物語を束ね、ボトムアップに多声的歴史を構築していく力が、今、求められているような気がする。別の言い方をすれば、それによってコミュニティが新たに浮き彫りにされ、記憶されていくのである。それには、それを可能とする仕組みが必要だ。私たちのプロジェクトが、ささやかながらもそんな仕組みを生み出すことに寄与していれば嬉しい。

そして、もちろん、このマガジンもそんな役割を果たしているのだろう。

1. 災害とコミュニティ

村本：東日本大震災によってコミュニティが受けた影響とレジリエンス、復興のプロセスを記述するというのが私たちの研究テーマなのだけど、コミュニティをどんなふうに定義して、レジリエンスの発動を語るといいのかな。

アルドリッチは、レジリエンスを「連携した働きかけと協力し合って行う活動を通じて、災害などの危機を切り抜け、効果的で効率的な復興に取り組むための地域が持つ潜在力」と定義し、行政区で区切って、ソーシャル・キャピトルをボランティア組織の数、投票率、地域のイベントへの参加などで測り、その変化を比較している（アルドリッチ, D. P.『災害復興におけるソーシャル・キャピトルの役割とは何か〜地域再建とレジリエンスの構築』ミネルヴァ書房, 2015）。

私たちの研究では、おそらくそんな切り取り方にはならないよね。

中村：社会学的関心から言うと、場としてのコミュニティと関心としてのコミュニティがある。後者の方は、場がなくてもあっても、関心があればつながるので、ネット社会もそうだし、関係性ですよね。場というのは、もっと土着的なものも含むというか。

村本：コミュニティ心理学の言葉で言うと、地域コミュニティと機能的コミュニティとなる。

中村：それに近いかもしれない。言葉の話だけど。また別に、関心としてのコミュニティ、機能的コミュニティはアソシエーションという言い方もあって、契約的というか近代的というか、土着的なコミュニティをコミュニティと、あえて分けることもあります。二元的な対置という感じはしますけどね。哲学的というか、現象学的社会学的に言うと、生活世界は私たちの感情とか身体とか集合的記憶とかいうものを取り込んで、かならずしも分節化されずに前言語的なものと混然一体となってそこにあるという把握も大切です。機能的コミュニティに近い概念は、システムといい、それが分化・分業しあって近代社会になっていく。

村本：現代社会はどちらかと言えば機能的コミュニティに力点が移っていったけど、災害となると、あらためて原初的というか、地域コミュニティというものにもう一度立ち返る。とくに直後。時間経過とともに、ネットなどを通じて機能的コミュニティも活性化していくのだけど。私たちが「臨地」と置いたように、地域というか、古めかしい土着のコミュニティの話に戻りたくなる。

中村：災害ユートピア論もそうですよね。48 時間以内のつながりで賦活させられていくものは、そういう感じがしますよね。二項対立的なものでなくていいんだけど。東北はやっぱり広かったからね。

村本：とくに東北の人たちにとって、「地」との結びつきがどんなに重要か。身体をそこに置く土地があって、土地と共に生きてきた。

中村：そうだよね。防波堤なんか作って、近

代社会の防災システムっぽく入り込んでくるときに、ものすごく批判があったものね。

村本：気仙沼の復興計画は「海とともに生きる」。熊本もそうかもしれないけど、人々が土地と結びついて生きてきた場所。

中村：新潟中越地震の時もそうかもしれない。都市型とはまた違った問題。高い防波堤だと海が見えないから、アクリル板で真ん中に穴開けたり。

村本：岩手では、アクリル板の窓をつけた防波堤がひとつあったんだけど、それは抜けちゃったらしい。そういう意味では、コミュニティが受けた影響って、その「地」に住めなくなった。放射線被害を受けた地域や沿岸部。土地を離れざるをなくなったというのは大きな痛手だったと思う。

2. 土地の物語と言葉

鵜野：ひとつ思い出したのは、今、スコットランドで、それぞれの地方にストーリーテラー、語り部を育てるっていう活動をしている。別にプロの語り部を養成するというわけではなくて、月 1 回の日曜日とか定期的に子どもたちを集めてやっている。そこで重視しているのは、場所と関係する話。ここでこんなことがあったんだよとか、この石にはこんないわれがあるんだよとか、ここに河童が住んでいたとか、武将がここで討ち死にしたんだとかいった話を、その場所に行って、語って聞かせる。

そこには、子どもたちだけでなく、いろんな世代の人たちに集まってもらう。そうすると、20 代、30 代の人たちが最初は聞き手として、それから今度は語り手として参加していく。そうしていくと、そこに伝承ができていく。最初は都会から呼ばれた歴史家とかプロとして活躍しているストーリーテラーが話したとしても、二回目、三回目からは、その地域の人たちに主導権を手渡していく。それによって、地域独自のレジリエンスみたいなものを引き出すことができる。

震災プロジェクトに参加して考えていたのは、最初はこちらでアレンジして伝説や昔話を語っていただく場を設けて、こういう活動に関心を持っていただく。次に地元の方が主体となって語りの場を作っていってもらう。それも一年に一回ではなく、月一回とかに移行していく。そういうノウハウを地元の方と一緒に構築していけたらいいなと。

村本：そうなんだよね。そういうことになればいいなと思ってやっているけど、多賀城にしても福島にしても、参加者が多くないんだよね。その人たちがやっている集まりの方が一定の固定客が集まっているというか。外部者が関わることで、新しい結びつきが生まれたらいいなと思うけど、まだそういうふうに実現していない。

鵜野：それと、昔話や伝説よりも、方言やその土地の言葉の方がもっととっつきやすい。子どもたちにとっても、自分は使わないけど、ばあちゃんが使っている食べ物の名前なんかを教わると、自分の住んでいる土地に愛着が出てくる。そしてそれが物語につ

ながっていく。そういう方言、ダイアレクトにもっと注目してもいい。

村本：そういう意味でも、全国に散り散りになってしまった人たちは、土地とともに言葉も失ってしまっている。

鵜野：だからこそ、今は住んでないけど、生活と密着していた言葉として、それぞれの土地の言葉を大事にする必要がある。

3. 危機に瀕して覚醒するものと外からのまなざし

村本：外から仕掛けるというより、内側から生み出されていくものに注目したいなと思うのだけど、宮城民話の会の小野和子さんたちの活動はその後、どんなふうに展開しているのかな。

鵜野：震災前と後とではずいぶん違って、市民の関心が強まったと。

村本：それはプラスの面だよね。どんな要因がその変化を引き出したのかな。

鵜野：今まで当たり前だと思っていたことが、そうじゃないんだと気づかされたことが大きい。

団：そやけど、地域社会はずっとじわじわと意識しないで、失われ続けていたということがあるじゃないですか。それが、今回みたいに被災によって大きく失われた、奪われたと思うと、覚醒するところがあるよね。

鵜野：そう、実感した。それまでもずっと失われていくものはあった。ローカリティというか、地域のつながりみたいなもの。それが震災によってあからさまに劇的に失われたことで、その大切さにいや応なく気づかされた。大事にしようという意識の覚醒が起きた。

村本：そうだねぇ。一緒に丸森の民話の学校に行って、たくさん被災の話を聞いたけど、何もかも失くしたところで、自分には民話があったという原点に戻って、それを大事にしたいと思い、立ち上がっていく。生きていく力になったという物語があった。それを東北のレジリエンス、資源だとすると、外部にできることは何だったんだろう。たと

えば、関心を持って耳を傾ける、訪ねるということをすごく喜んでくれた方々がいましたね。

中村:ナラティブの力だよね、関心持つ方も何か別のベクトルを持っている。

団:スポットライトって、よそからあたるから意識されるのであって、そこにいる人がそこに照準してライトあてるっていうのはやりにくいと思う。外の声とかいうのは、ある意味、そのことを目覚めさせるのに有効に働く。今回のことだけでなく、そういうことって一般的にありますやろ。歴史でもそうやな、そこにいる人はなんとも思わんけど、ちょっと離れた人、遠くの人が「それは大事なもんですよ」という、そういうことがあることやと思う。

中村:小野さんは、聞く立場で民話の採取を始められた。外からのまなざし。小野さんに重ねてさらに思い出したんだけど、鶴見俊輔さんが熊本時代に絵本の会をやっていたときの話があって、私、感銘を受けたんだけど、女性の方が嫁いでいく。で、自分を変えていく、名字を替えることが女性に多い。そのことの良し悪しは別として、自分を変えていかなければならない。そこで培われていく力強さがあって、それは、生まれた町と、子どもの手をひいて歩いた町、つまり子育てした町、自分が死んでいく町を転々としながら、自分の身をメタモルフォーゼさせていく、男のレジリエンスと違う。いじめがあったり、差別があったりしても、子どもの手を引いて歩くことによって愛着がわいていく。嫁いびりも含めて。絵本の会でそういうことを女性たちが語り始めて、女性たちの力を鶴見俊輔さんが感じたっていう本を書いていらっしゃった。外から入ったのかな、だから我々にもよく伝わるようなものに（鶴見俊輔『神話的時間』熊本子どもの本研究会、1995 年)。

4. 子育てした町で紡がれていく物語

村本：そう言えば、飯館村で聞いたんだけど、女性たちは「ここに戻るのは無理」ときっぱりあきらめたのに、男性たちが未練たらたらであきらめきれない。土地に根差す力について話題が出たけど、それを奪われても、女性の方が新しくまた根差していけるってことなんだよね。

団:そやけど、その時に、生活の糧をどのように確保するかということを、思い込みも含めて考えたときに、女の人は強いなと思うんだけど、男の人は何にもないところで一から自分で始めることって少ないと思うんやな。転勤族だって、行った所で迎えてくれる人がある。それがあるのとないのと大きく違う。飯館から出て新しいところで始めるっていうのは、難しいと思う。単身赴任がこんだけおるけれども、単身赴任先で花開かせてるのではなくて、男はまた戻ってきたいと思っている。そういうのはおもしろいなと聞いてて今、思った。

中村:私は娘連れて、単親赴任したんです。

サンフランシスコ。そして子育てしたところは京都の御室（おむろ）。子育てした町っていうのは独特の愛着がある。

村本：子育てした町ってどういう意味を持つのかな？

中村：子ども目線。

団：速度が違うでしょ。

中村：速度も違うし、高さも違う。子どもの手をひいて歩くと時間かかるからね。いろんなものに眼が留まるの。

村本：そういう意味では、東北で生まれ育った人と、嫁いでとか、仕事とかで大人になってから東北に行った人とで何か違いがあるのかな。

鵜野：おもしろいなと思っているのは、小学校の元先生が語り部になっているということが多い。地元で生まれ育って、そこの話という方もあるけど、外から入って話を聞いて、それでおもしろいなあっていうので、最初は聞き手で、退職と同時にトレーニングを受けて、語り手になっていく。ほぼ全員女性だけど。それは東北だけじゃなくて、一昨日も日本昔話学会で秋田と喜界島と栃木出身の人に民話の語りをしていただいたんだけど、三人とも先生だった。

団：それな、教え子がおるということが関係あると思うわ。自分の行動や行為へのフィードバックだけでなく、自分の行為の目の前に、そこで生まれたり育ったりしている人があるというのは、どんな物語であるかは別にして、それぞれに物語があって、それを束ねているのが学校だから、そのことがこの人の中にもたらしていることは大きいと思う。この前もちょっと書いたんだけど、退職した地域の公務員や教員がその後、どんなふうに地域と関わるのかなと思ったときに、今の話はなるほどなと。

鵜野：教え子の親とかおばあちゃんとか、コミュニティの人とかとのつきあいがあるんですよ。聞き手としていろんな相談の窓口として何十年も話を聞いてきて、そのなかに世間話もあれば昔話もあるっていうのか。それを今度は地域の人に返していきたいというのかな。

村本：やっぱりつなげていきたいと思うんだよね。歴史とともにある時間軸をつなげていくことで、そこに自分も含みこまれていくというか。もらった感じ、受け取った感じがあるんだよね、きっと。でも、それって女性の発想じゃない？男たちはどうなの？

団：基本的にサラリーマンやってたら、自分の家に寝に帰るっていう感じやから。

5．共同体によって生み出される文化と歴史

鵜野：セカンドライフとしては、文化財や自然の保護活動とかのボランティアやったりしている男性が多い。女の人は昔話が好き

で、男の人は伝説が好きだと言われている。

村本：伝説？

鵜野：男の人は、実際にあったとされる話が好きなの。昔話は、昔々あるところに、という架空の話なんですよ。それに対して伝説は、昔、明智光秀がここで殺されたとか。

中村：歴史愛好家になっていく。

村本：ふ〜ん。やっぱり人類が達成してきたことに誇りを持ってるんだよね。故郷をあきらめきれない話みたいに、土地や家、先祖が守ってきたものを捨てられない。沿岸部の漁師たちがふんばっている話をたくさん聞いたけど、仕事を通じてつながった話だった。

団：そやけど、漁師なんかは、一人で海に出て自分の腕ひとつという仕事の仕方してるやろ。

村本：長い時間経過のなかで、さまざまな協働の知恵が文化として成立していることがあるらしい。漁村には、「水揚げは個人のもの」という平時の論理と、「水揚げはみんなのもの」という災禍の論理が共存することで、その土地で暮らすことを可能にしてきた。金菱さんは、「内なるショック・ドクトリン」を活性化させることで、新自由主義の台頭という外からのショック・ドクトリンを未然に防いでいる漁村の例を４つ紹介している（金菱清『震災メメントモリ〜第二の津波に抗して』新曜社）。

中村：私の父方の家系は網元なんですよ。伊勢志摩鳥羽の。浜辺は農地改革されなかった。漁場は農地じゃないってことで。それで古いタイプの共同体が残っていて、網元はそこの浜を支配するから、責任を持ってて、誰かが海で亡くなると、残された家族の面倒を見る。良し悪しなんだけど。支配する・されるという関係があって。

そういう男たちと、あと海女さんというのがいて、海女さんは海女さんでまた力を持っていて、網元も口出しできないような組織があるんですよ。

村本：水俣でもそんな話聞いた。網元を中心とした共同体。そういう共同体が残っていたところでは、それを手掛かりに前に進めたっていうのがあったのかな。民話の会の話は、外からの関心が引き出したということだったけど。

鵜野：みやぎ民話の会の場合は、震災後 20 代、30 代が関心を向けてくれた。メディアテークとかがつなぎ役になって。

中村：きれいな映画でしたね、三部作。だから、それは、関心としてのコミュニティとして存在感をもっていました。そしてなんといっても場としてのコミュニティが活き活きとしています。場と関心は重なり合うんですよ。震災をいくつか社会が体験してきた（東北記録映画三部作濱口竜介監督『なみのおと』『なみのこえ』『うたうひと』）。

アイルランドのダブリンのから 2 時間程のところに、タラの丘というのがあって、記念碑があるんです。そこに古本屋があって、書物がたくさん乱雑につまれた小屋のなか

で読書会を開いている。その店主である小説家がいました。アイルランドの古い基層にある土着の文化とキリスト教との出会いの葛藤が文化を産んでいる様子でした。

タラの丘（中村提供）

小説家が営むテリング・キャビン（中村提供）

6．多声的な物語と記憶の継承

村本：どんな形で成果を表現していけばいいのかな。

中村：いろいろなコンテンツを並べたら、それぞれに関心を持ってもらえると思う。レジリエンスというのをあえて日本語で言ってみるとか。水俣の「もやい」「もやいなおし」みたいな。

ハンセン病のことをやってる院生がいて、あちこち話を聞きまわっているんだけど、裁判で得た賠償金をどう使うか。人生残り少ないし、家族とも関係切られているから。「社会復帰」って言っても、「社会復帰」できるか。そもそも「復帰」って概念自体を再考すべきではないのかということをインタビューから感じ取っていくのです。やって欲しいことは記憶だと。忘れないで欲しいということが共通にでてきます。国立の記念館を作ろうとしてる。記憶が社会復帰であって、そのためにお金を使って欲しい。そうした語りをする。それを聞く人がいる。ひめゆりみたいに語り部がいればいいけど、また別のカタチでの記憶の継承が課題です。どういうふうに語ったらいいのか。聞く人をどんな具合に増やしていけばいいのか。そんな話を聞いた院生が感銘を受けて帰ってきた。

小野さんなんか、聴く力があるなって思う。外からできることっていうのは聴くこと。

村本：東北には、語り継がなければ、語り継ぎたいという強い意志を持ってる人たちがたくさんいるけど、需要と供給から言うとどうなんだろう。

鵜野：今、聴くことへの関心が強くなっているのも確かだと思う。「みやぎ民話の会」もそうだし、東京で野村敬子さんが主宰している「聴き耳の会」もそう。どちらの会も、昔話や伝説といったいわゆる民話だけではなくて、戦争体験や子育て体験なども含めた「自分史」や「一人称語り」も積極的に聴

いていこうとしている。

中村：風化させないというのはみんなの願いでしょう。行けば相互作用が出てくる。

団：あのさ、今、話題になってて割合おもしろいなと思っているのが、「ファミリーヒストリー」っていう NHK の番組なのよ。これは、たとえば中村正さんという人について、ルーツを探るっていうんで、自分の親のもうひとつ上くらい、つまりおじいさんとかおばあさんまではわかっているんだけど、そのもうひとつ上になると、圧倒的多数の人がほとんど情報を持っていない。番組の調査隊が掘り返してくると、日本という国がどのくらい、侵略だけじゃなく、交易であったり、災害であったり、災害で村の人がそのままどっかに移動したり、江戸時代だったら人材を他の大名のところへやったりとか、移動は基本的に家族が単位で、中国も出てくるし、台湾も出てくるし、もちろん韓国も出てくるし、南洋諸島も出てくるしで、語り継ぐで言うなら、実は我々の持っている語り継がれるべき個人や家族の歴史について、ずっとフェードアウトを基本にしてきたところがあるなと思うと、それは何でやったんやろなというのと、今、そのことをやっぱり語り継ぐべきじゃないかというのは何でやろなと。

水に流す、なかったことにして次にという日本的意識は、やはり辛く苦しいことも多かった人々の知恵なのではなかったのかな。

何年か前にイギリスの公文書館に行ったら、たくさんの人たちがルーツ探しをしていて、ブームなんですって言ってたやん。あういうことって、被災問題に関わってというより、我々の社会の時代とかがそういうことに向かわせるのは何なんやろなって最近思ってててることがあって。

我々はたまたまこういうことやってるから、被災地に行って、漫画展やって、漫画展の場には、そこにいる人たちではない人たちの家族の物語があふれているわけやんか。それを見て感想を言う人はただの読者なわけやけど、あれを見て、自分のことを語りたくなる人がおるわけやんか。実際に語るわけや。そこで何が行われているんかっていうことはそう簡単に定義できへんけど、でも、そういうことを普通、人は突然語ったりはしないからさ。東北でやってるあの漫画展の場では、それによって、そこに来る人たちが自分の持ってる家族というものの歴史や記憶を言葉にするってことがちょっと促進されることがあるわけでしょ。ってことは、その人が意識しているかどうかに関わらず、そうしたくなるってことは何か目的があるよね。そうすることは、さっきから言っているように、自分の力で自分を回復させていったり、今いるところから次に向けてスタートさせるってことかなと思ったときに、そういうことを促進させることができてるってことは、やっぱり資源なのよね。それがあっちこちでちょこちょこエピソードとして見えてきてるよね。

村本：ひとつ確認しておきたいんだけど、漫画展で語られたエピソードについてデータとして使用するということの倫理的問題についてはどう整理したらいいかな？京阪でやった時は、あえてそれを統制して、インフォームドコンセントとともにエピソードを

集めたわけだけど、東北の漫画展では偶発的に語られたエピソードだから、そんなことはやっていない。もちろん、名前とか年齢とかそういった個人的なことは何ひとつ聞いてないわけなんだけど。それはエピソードとして公表してもいいものだろうか。

中村：いいんじゃないの。必要だから、それは社会に役立つんだから堂々と。NHKがね、「クローズアップ現代」とか、Eテレで、ものすごくステレオタイプ化した切り口で物語化していくじゃない。物語構造が画一的で、主流の物語として、公認されてインプリンティングされてしまう。たとえばこの前、Eテレが介護殺人の番組やったんだけど、あれすごく反響あったそうです。でも、決定的に足りない視点がある。それは男性介護者問題です。死亡事例の加害となっている息子や夫介護者、介護殺人の場合。そのことがオミットされていく。それで、「母さん悪かった」っていうお涙頂戴式の物語になっていく。構造変わっちゃうわけ。減刑理由にもなっていきます。これは共軛関係といいます。そうした生きている者の罪を軽くする物語となっていく危険もあります。もうひとつは、殺めたくて踏みとどまった人たちが圧倒的に多いことをきちんと把握すべきことです。つまり殺人になってない。そのことの報道が何もないところで、衝撃的な殺人という報道がある。自殺もそうだけど。そうなると、結局、介護殺人は懲役つけるけど、執行猶予ですよっていう、一種の社会の共犯関係を強めている点を無視できません。福祉に向かわずに。そういうふうに、違うストーリーテリングになっていく。我々の頭も洗脳されていく。語られていないことをきちんと見つめる力がメディアリテラシーです。沈黙という語りがある。だから、多声的にナラティブを再構築していかないとね。ポリフォニーです。小さくて個別的だし何も力は持っていないように見えるけど、日常生活的には大事な声としてあるという。こういう文脈がいいんじゃないかな。それをスピリチュアルと名付けるかどうかは別だけど、その複数の声を採取していく。

7. 復興の陰で

団：阪神淡路の時に、労働の場の喪失、破壊みたいな理解っていうか自覚っていうのはどのくらいあったの？客観的にはもちろんあるわけだけど。

村本：東北とは違うんじゃないかな。もちろん会社が壊れたり仕事がなくなったりはしてるわけだけど、漁業とか農業とか自然とか土地との結びつきとかとは違う。

中村：第一次産業だよね。

団：そうすると、ずいぶん意味の違う被災やんか。基本的な産業構造のダイレクトなダメージと、会社なんかは約束事やからな。建物がつぶれたら、別のビル借りるとか。仕事として働いている人にとってはどっちも第一義的なことなんやけど。さっき男と女の違いが出てたけど、労働の場所が被災地であるってことによって、そこに男の人が前面に出ざるを得ない状況があるのかと。

村本：逆に言うと、福島なんかでは、男の人が働かないといけないから、家族だけ避難させるということもあった。

中村：それを周辺と中心と考えれば、周辺がものすごく力を持ってるわけだよね。第一次産業だからさ、そしてそこに原発を持って行ったわけだから、そこが破壊されたっていうのは大きいよね。

村本：一方で原発労働には全国からいっぱい行ってるわけだよね。

中村：そうそう、いびつな形で。そこはまた周辺化された労働で。

団：安全を考える家族は子どもを連れて避難しているわけだよね。被災は被災だけど、それを家族がどう意味づけて、次の一歩を作るかっていうと、それは個別というのか。

村本：福島の優秀な若手フリー・ジャーナリスト藍原寛子さんが自主避難のことで論文を書かれた。また、立命館にお招きして話を聞けたらと思っているんだけど、難民の話。インタビューできた人の特徴ともいえるだろうけど、そうやって全国にバラバラになってしまったけど、それぞれが何らかの社会活動につながっていって、新しい公共圏が生まれているという。面白かったのは、戊辰戦争でサンフランシスコに避難した人たちがいたらしい。さっきの団さんの話じゃないけど、長く葬り去られていたけれど、ある時に日本名の書かれた墓石が見つかって何だろうと掘り起こしていって明らかになったとか。

団：ものすごくおおざっぱなことを言うけど、自然に置いておけば消えていくようなものを、何か大きな力で揺さぶって復活させたりするとか、そういうメカニズムなんじゃないのか。

中村：原発は新しいことだからね。

団：原発って扱いに困るよな。誰にもどうにもできてへんや。片づけてもいないし、福井も古なったのまた動かしたりしてるやんか。函館が揺れてたな。ちょうど大間の向かい側やんか。

村本：漫画展が呼び起こすものもあるけど、それだけじゃなくて、支援にいってるっていう名目が作る文脈もあるよね。ただ単に来たというだけじゃなく。一年目はあふれ出る話っていうか、外から来て、関係性がないからあふれ出るように話すということが起こった。タクシーでもレストランでも。時間経過とともに、関係性が深まる中で生み出される語りになっていったかな。

それから、東北でも福島でも、いろんな人が行くということ自体がレジリエンスを引き出してるって側面がある。とにかく、全国からボランティアが来てくれたということで、自分たちも頑張ろうと。みな口々に言うことのひとつ。応援されているということで引き出される力がある。一方で、自衛隊の株が上がったという側面もあるんだけど。

中村：他方、安保法案で自衛隊が世界でものすごく実地練習してるよね。同時に進行してる。

村本:鎌田慧・斉藤光政『ルポ下北核半島～原発と基地と人々』(岩波)の中に出てくるけど、トモダチ作戦は有事の動きの予行練習だった。

団:風化させないというのがベースでしょ。

中村:いろんな人が行くのがいいんだろね。院生たちも毎年変わって。

村本:学生が行くと喜ぶよね。人生の先輩として教えてあげるポジションになる。

団:逆に、訳知りそうな人に視察に来られるのってなんだかちょっと嫌な感じがあるんじゃない。反発とか自動的に出てきそうだよね。

中村:むつの支援者支援でも、我々がやることに院生たちが黒板書いてっていうのがセットとしてあるのがいいんだよね。

鵜野:さっき紹介した仙台のメディアテークでやっている「てつがくカフェ」の面白いところは、いろいろな発言をボードに板書する役の若いスタッフがいること。この板書がイラスト入りで実に分かりやすい。小難しい「哲学」を、柔らかい、ひらがなの「てつがく」に変えてくれる。うちでもこういうのを取り入れるといい。

村本:あと多声的なものとしてどんなものがあるかな。物語、漫画展、院生の存在。周辺にあるエピソードをもう少し聞き集めたらいいのかな。民話の会の人たちとか、頑張ってる NPO とか。

団:亘理町の保育園に花火大会をし続けている人がいて、BS で紹介されてたけどな。

村本:外から行った人たちより、そのことが中の人たちにどんな影響を与えたのかみたいなことが知りたいな。中で芽生えつつあるものを外からどんなふうに支えられたのか。そういう意味では、民話の会の話では、メディアテークの映像化がそれを支えたんだよね。

鵜野:民話の会の活動でもうひとつ特筆すべきなのは、2～3 年に 1 回開いている「民話の学校」。宮城県内のある会場に、全国から大勢の人が集まってくる。そして昼間は宮城の民話を聴くんだけど、夜はそれぞれ自分の知っている民話を語ったりわらべうたを歌ったりする。語り手と聴き手に分かれてしまうのではなくて、語りの場を共有する。この間イギリスでインタビューしたスコティッシュ・ストーリーテリング・センターの所長さんが、「ナチュラル・シェアリング」、語りを自然な形で共有することの大切さを話しておられたけど、「民話の学校」にはこれがある。そういう、シェアリングというところから対話が生まれ、新たな絆やつながりが育っていくんじゃないか。

団:東北大学の長谷川啓三が地元やから、結構いろんなことやってるな。川柳とかペットとか。細かいことは知らんけど。

村本:コミュニティが破壊されただけでなく、揺れたことで生まれた波動がつないで

いくわけだよね。阪大の渥美さんがボランティア論で最近、出版したけど（渥美公秀『災害ボランティア』東京大学出版）、災害ボランティアによってつながれていく人間関係がある。私たちもそうだよね。これをきっかけに出会った大事な関係がある。

中村：やっぱり「レジリエンス」って言葉を日本語にしていくことが必要だね。その「てつがく」みたいに。

村本：今のところ日本語としてあるのは、しなやかな力、逆境を跳ね飛ばす力、回復力、復元力。

団：割合に表通りを行く言葉ばかりがよく出てくるからあえて聞いてみるけど、たとえばさ、ずる賢さとか、たくらみとかさ、戦略的なことで、被災地で活性化したことってないのかな。

村本：復興風俗嬢だったっけ。本出たよね（小野一光『復興風俗嬢』太田出版）。読んだよ。それは本当にしたたかさっていうのか。被災直後からすごく流行っていたらしい。そこに人間的な出会いが描かれていて。

中村：欲望産業に眼をつければそうなる。復興産業に手を出す。でもハイエナみたいにたかってという面もある。肯定するかどうか別にして、日本社会の縮図のようにして復興もかたどられていくのでしょう。復興過程の災害っていう本がある。阪神淡路と東北について。一部の権力者たちたけが利益を得ていく（塩崎賢明、『復興〈災害〉―阪神・淡路大震災と東日本大震災 』岩波新書、2014年）。

村本：防潮堤とか復興道路なんていうのも、そういう面があるかもしれない。便利になる一方で失うものがある。遠野は一年目私たちがプロジェクトをやったけど、沿岸部のどの町にも遠野を通って行かなければならなかったために、歴史的に遠野が後方支援する伝統があった。でもバイパスができて、遠野を通らなくても行けるようになったことが未来に何をもたらすのかとか。

8．共同体感覚と時間の蓄積

団：コミュニティなんていうのも具体的な形をもたないもんやんか。形を持たないものが失われたり壊されたりした時に、それを復旧するっていうには、そこにどんなものがあればいいのかな。形あるものが復活、復旧するには、コストやなんかもわかりやすいやんか。ある種、加速度つくよな。防潮堤やらなんやらにしても。そやけど、機能としてあったものを回復、復元するっていうときに、何が大事で、何が気遣われていなかったりするんやろ。

村本：少し話が変わるけど、コミュニティってことで言えば、昔から京都文教の集中講義でずっとグループワークやりながら、コミュニティを考えることをやってる。そうすると、最初は、コミュニティって言葉を知らなかった、自分はコミュニティなんて関係ないと言っていた学生たちが、仲間たちと一緒に活動するなかで、意識してなかっ

たけど実は自分にもコミュニティがあったんだと目覚めていく。そんななかで、コミュニティの一員として貢献したいという気持ちが生まれていくんだよね。それは感動的でもあるんだけど、昔の人たちは強くコミュニティ感覚を持っていた。復元というより、意識していくプロセスというか。

団:それで言ったら、昔、まさにそういう世代間のギャップを考えさせられることに直面したことがある。私の住んでた地域に公民館を建てるという話が出てきて、建設費がいくらかかるって分かるから、負担額について住民みんなで民主的に話し合いをした。そして、賃貸の人と持ち家の人とは差をつけて、一世帯いくらずつ分担しましょうと、延々と議論を続けたのよ。そして結論が出たところで蓋を開けてみたら、昔の庄屋さんの〇〇さんが、「ほなワシは 100 万円出すわ」という話しになって、そしたら、△△さんも、「なら私も 100 万」って。結局、賃貸住まいの私たちは最初 1 万円って話にまとまっていたのだけれど、千円でいいっていうことになった。

その時に、地域住民が皆で話し合いをしたけど、ずっと農業をやってきた、ここを自分たちの土地だと思っている地域の人には、面白いことが起こるんやなと思った。そして実際、あれから 30 年以上経って、あの地域に、当時賃貸住まいだった人が引き続き住んでいるのは希。100 万円出した人達の家や畑や、家族は今もいる。地域ということを、余り今の人だけのネットワークに限ってしまうと、10 年ももたないものになる。

それと同じことが、今、自分の住んでる新興住宅で起こったときに、まったく別の話になる。同じように集会所の新築問題では、全戸平等負担で実行したのだけれど、昔ながらの氏神さん(神社)の屋根の葺き替え寄付金を町内会で出すって提案に、そんな宗教的活動に、なんで均等に町内会で金を出すのか!ってもめる。有志でやればよいと意見が出る。昔から・・・でやってきたことが、民主主義の議論で否決された。その結果、うちの町内には今、おみこしが巡回してこない。氏子の町内ではないということ。だからうちの町内の子どもたちは、お祭りって言っても御輿がかつげないし、御輿は隣の町内で U ターンしてしまう。もっとも、最近では、担ぎ手の絶対不足で、軽トラックの荷台に積んで回ったりしているけど。

鵜野:この間、イランの民俗学を研究している大阪大学の 30 代の先生が話していたことだけど、イランでは 1970 年代のイスラム革命によって、伝統的な祭りや年中行事がことごとく廃止されて、もう残っていない。それに引き替え日本では、都会でも田舎でも祭りは今も盛んだ。こんなに祭りの好きな国は珍しいんじゃないかと。

先日、奥三河の「花祭」を紹介するテレビ番組をやってたけど、都会から移り住んできた若い親子や和太鼓集団の人たちが、地元在住のお年寄りに技能を仕込まれて頑張っていた。これと同じようなことは東北の被災地でも起こっていると思う。

村本:お祭りっていうのは、地域の力を凝集させる力だよね。気仙沼かどこかで獅子舞が 50 年くらい前いったん廃れかけたんだけど、これではいけないと頑張る人たちがいて、女はダメとか子どもは入れないとい

うものだったのを、みんな入れて保存会を作った。その時の子どもたちが、今回、何とかつなごうと、みんなで移った仮設で手作りの獅子を作って祭りをしたんだって。違うところに避難した人のところにも呼ばれて行ったり。

そういう意味では、東北で訪れる町のことを院生が事前に調べるでしょ。そうすると市町村合併があって、文化圏の違うものが同じまとまりで括られる。うちの田舎でも、この前、帰ったら、これまで聞いたこともなかった祭りが地元の祭りとして宣伝されてて、へぇ知らなかったなあって驚いた。それと、ほら、昔の藩が生きてるなと思ったり。戊辰戦争の影響が語られたりって。

団：それはさっき言ってたような歴史好きのおっさんなんじゃないんか。

村本：それでも文化というのか、受け継がれて人々が共有している風土ってあるんじゃないの。私の田舎だったら、薩摩なんだけどさ、小学校でも中学校でも、先生たちからいつも「泣こかい、跳ぼかい、泣こよか、ひっ跳べ」って教育されてきて、染みついてしまったものがある。男女関係なく。目の前に大きな水たまりがあって道をふさいでいたら、泣いてないで勇気をもって跳べっていう意味で、そうやって子どもの頃から叩き込まれてるからさ。関ヶ原の合戦で敵に背を向けないで敵陣を突き抜けた勇気をたたえる祭りがあったり。

私の友人が遠く離れたところで私と同じ郷里の人と出会って、私から聞いたこの話を話題にしたところ、相手がものすごく喜んで盛り上がったって。直接会ったことがなくても、ちょっと共同体を感じるよ。

団：いつも跳んでるわ。

村本：ずっとひとつのところに暮らしている人と、転々としてきた人とでも違うよね。

団：自分の選択で飛び出した人と、せざるを得ない状況のなかで出た人とでも違うでしょ。状況によって出ざるを得なかった人っていうのは、その場所への思いが強いんじゃない。

村本：たしかに、自主避難の人たちの福島アイデンティティは強い。故郷は遠くにありて思うもの。離れることで美化される側面もあるしね。

9．記憶の継承と社会

中村：あと何年あるんだっけ。6年目だからあと5年か。長いよね。

村本：そう、それでも、まだ継続のための苦労があるんだよな。

団：外から行く人間が意識的に風化させない、イベントに終わらせないという戒めをも持って十年と言っているのとは別に、それぞれの被災地にも温度差や状況差があって、時間経過とともでも違いがあって、それぞれの地域の時間経過のなかで変わっていくものがあるからさ、現地のモチベーショ

ンが変化したり、そろそろ気分展開したいっていう気持ちもあるよね。漫画展はモノやから、大きく変わるわけじゃないけど、形として見えないものとしてやっていることに、今を反映してしまおうという意見も出てくることもある。

村本：十年もやっていれば、社会変化は当然あるよね。

団：危機感が回復を促すって側面あるから、今回の震災で危機感を煽られて復活したものもあるのかっていう視点もあるんか。

村本：復活かどうかわからないけど、南三陸のホテル観洋、一年目、ただでさえ過疎化していたところに被災で、本当に町がなくなってしまうっていう危機感から必死に努力していた。老体に鞭打って、お客に来てもらおうと、語り部になって、今も毎日語り部バスが出ている。

中村：そういうナラティブを追加的に集めてみたらいいじゃない。我々の証人になるということに応答するようなナラティブを調査してみるとか。

鵜野：去年、宮古からの帰りに寄った大槌町の「風の電話」、今年２月にＮＨＫが特番で取り上げて、6 月のはじめにもその拡大版をＢＳでやっていた。その中で紹介されていたのは、「風の電話」にやってくるのは確か 6 割から 7 割が男性だと。そして訪問者の多くが、一度だけでなく何度もやってくるという。

返事がないことは分かっていても、電話ボックスの中に入って、ダイヤルを回して受話器を耳に当てながら、亡き人に向けて語りかける。そこには「人はなぜ語るのか、ナラティブとは何か」という根源的な問いに対する答えのヒントが隠されているような気がする。

村本：田老の語り部の話も面白かったよね。去年出会った女の人。義父が津波の話を繰り返しするのを、いつもまたかと思いながら聞いていたのを、義父なき今は、語り伝えなければと 180 度転換して頑張っている。

中村：大川小学校の傾いた慰霊碑とか。形としてどう残すかっていうのも語り部とともにおもしろいよね。

団：それで言えば、残したくないって強く主張する人がおるやないか、あれってなんでなんやろ。気仙沼の陸に上がったあの船。

中村：ダブリンなんて、それこそ、大飢饉の記憶を残そうとする。形がないから、再現するのよ。街中にいっぱいモニュメントがあって、死んでいく姿とか、物乞いしてる姿とか、あちこちに彫像で残ってるのよ。それはなんだろね。

村本：でも、何を残すかはきっとポリティカルだよね。

団：ポリティカルということは普遍的なことではなくて、その時の為政者というか権力者の話やんか。それとは別に、何党が勝とうが負けようが、その土地にずっと生きる人の欲望としてさ、残したいっていうのが

ないんかな。たとえば、あの陸に打ち上げられた船、あれは、被災の結果やけど、観光資源としたって、あんだけインパクトあるものないよな。絶対あの前で写真撮りたくなるよね。すごいな、自然の力ってって。あれ、買い取って、残しておきたいって発想にならへんのかな。

村本：そんな議論もいろいろあったけど、それに勝る反対があったわけだよね。見たくない、思い出したくないっていう。

中村：記憶にかかわるダークツーリズムと、このプロジェクトの証人になるということの関係でも論点はいっぱいある。たとえば水俣等の公害の歴史の記憶と現在の町の再生のバランスのこと。水俣を象徴化して記憶したり、社会運動的に扱うこともあり、地元ではしかし再生した面もあり、画一的な語りだけでみないで欲しいという地元の人もいる。ダークツーリズムという呼称も含めて議論していければいいかな。地元のレジリエンスに無関心でないほうがいいとは思う。

村本：福島第一原発観光地化計画っていうのもあったよね。

中村：それもダークツーリズムの話だけど、負のイメージだけで語られると地元の人は辛いよね。

団：それに比べると、あの船は罪がない。結構でかいし、ちゃんと船の形してたし。あれを見て、ストックホルムのヴァーサ号博物館を思い出した。まだ帆船の時代（1628 年）にものすごく豪華なフル装備の戦艦を作って、処女航海で沈んだ。豪華にしすぎて浮力不足だったのだったかな。沈んだところが北極海の深いところだったから、腐食しなかったのよ。それをずいぶん経ってから（1961 年）、見つけたのよ。

当時の人は、国王がやったことだからかん口令引いて誰も話さなかった。それでみんなで忘れてたんやったかなぁ。300 年以上経ってから見つけて、引き上げて、船をそのまますっぽり収容できる博物館を作った。そやからその博物館は、7 階建て、地下二階のフロアにして、どこからでも船体を見れる。気仙沼の地上であの船を見た時、それを思い出した。すごいなって、だからもったいないなぁと思う。

村本：何を残し、何を語るか、それはどこかでトップダウンにコントロールされていく側面もある。コミュニティの物語と記憶がボトムアップに紡がれていくプロセスにコミュニティの外側から緩やかに連なっていく、そんなことがポイントになるのかもしれませんね。結論出ませんが、今日はこのあたりで。